

浅野川の桜、鮮やかに

「名作」を往く

熱狂的なファンというわけではないが、三十歳の男でも「ユーミン」の楽曲は口ずさめる。

幼いころ、父が運転する車の中で繰り返しカセットテープを聴き、頭の中にはいくつものメロディーが浮かぶ。わたしが生まれる前の楽曲でも古くさが全くない。

その松任谷由実さんが金沢をイメージして作った楽曲があると知り、聞いてみた。こんな歌い出しで始まる。「見



知らぬ町をひとり歩いた。何年も前に作られたはずなのにやはり、すっと耳になじんだ。曲は「花紀行」。初めて金沢を訪れた春の日の風景が目の前に広がったような気がした。

小雪が舞う二月中旬の平日の午前、実際に曲作りをしたという浅野川の桜並木を歩いた。水路から川に注ぐ水の音だけが耳に届く。心安らぐ穏やかな時間に感じられた。

川沿いのソメイヨシノはまだ冬の装い。それでも少し赤くなった枝先のつぼみは、春の訪れが近いことを予感させた。「薄紅が、何てやさしいの。拾い集める人もいないのに」。薄紅色の花びらが散ったら、それをめぐる人でにぎわうのだろうか。

金 沢

松任谷由実「花紀行」



松任谷由実さんのシャツを作った宮谷隆之さん＝金沢市片町で

風情ある光景を見て創作意欲が湧くのは松任谷さんだけではないらしい。手帳を手に句作に励む石川県野々市市の女性(仮名)に声を掛けた。「川の流れが好きでたまに来るんです。次は桜が咲くころになるかしら」

松任谷さんの金沢好きはファンの間では有名。どんな人なのか知りたくて交流のある人を訪ねた。

「フライベートでいらしてもテレビやラジオに出ているときと同じように気さくな方。生地選びで迷わず、決断が速かった」。金沢市片町のオーダーシャツ専門店「金港堂」の社長宮谷隆之さん(仮名)はそう振り返る。自身もかつてはバンドマン。だからこそ「別世界の人」だと思っていた松任谷さんが、二〇一五年十月に来店したときには驚きを隠せなかった。

「とても緊張していてシャツのことしか話していない。帰った後は手の震えが止まらなかった」。その後、松任谷さんが満足そうに店のことを語っていたと人づてに聞いた。「御用達の店」として雑誌で紹介され、ファンからの注文が相次いだ。「気に入っていただけだとうれしい」。またの来店を楽しみに仕事に励む。

楽曲はカバーされ、多くの人が歌い継ぐ。色あせることのないメロディーが、金沢の風情を伝え広めていく。

きょうの
オススメ

(山内晴信)



花紀行 1975年に発売された荒井(松任谷)由実さんのアルバム「コバルト・アワー」に収録された楽曲。その後平川地一丁目や村上ゆきさんがカバーしている。アマチュアミュージシャンがこの曲を歌い、動画投稿サイトなどで映像を配信することも多い。

「名作」を往く